

# 有賀隆・（内田奈芳美）研究室

2018卒論参考テーマ・研究活動紹介



アユタヤ・水系コミュニティ建築の現地調査  
有賀隆研究室×チュロンコン大・国際共同研究

# 有賀研究室 フラットなチーム

## 自由な研究着想・問いかけ



永野聡  
理工総研研究員

博士後期課程  
メンバー

卒論ゼミメンバー



内田奈芳美  
客員准教授

国内外研究ネットワークメンバー  
U.C.バークレー・トリノ工科大・グルノーブル建築大・バルセロナ建築大・  
チュロンコン大・フェッラーラ大など



有賀隆 教授

民間企業・行政共同研究メンバー  
UR都市機構・JS住総合生活・佐藤総合計画・パナソニック・竹中工務店・  
まちづくりNPO・自治体行政ほか

修士課程メンバー

交換留学生  
国際メンバー



ローレーナ・アレッシオ  
高等研研究員



小松萌 助手

# 自己紹介



- 内田奈芳美(客員准教授)
  - 埼玉大学・人文社会科学部准教授
  - アーバンデザインセンター大宮副センター長
  - 早稲田大学・ワシントン大学大学院修了

主な業績:

(共訳)『都市はなぜ魂を失ったか～ジェイコブス後のニューヨーク論』講談社(2013)

(編集)山出保+まち・ひと会議著『金沢らしさとは何か』北國新聞社(2015)

(論文)「日本における地方都市型ジェントリフィケーションに関する試論」日本都市計画学会 (2015)

# 有賀研究室 2017メンバー（夏ゼミ合宿）







# 都市・まちづくりデザイン研究の 研究実践例

## 日米研究財団主催「東日本大震災緊急シンポジウム」



Moderator

Dr. Takashi Ariga, Professor, Department of Architecture, Graduate School of Creative Science and Engineering, Waseda University  
Presentation Material (10.8MB)

Panelists

Dr. Eran Ben-Joseph, Professor Head, Joint Program in City Design & Development MIT School of Architecture + Planning  
Presentation Material (5.7MB)

Dr. Peter Bosselmann, Professor of Urban Design in Architecture, City & Regional Planning, and Landscape Architecture; Co-Chair, Master of Urban Design Program, College of Environmental Design, University of California, Berkeley

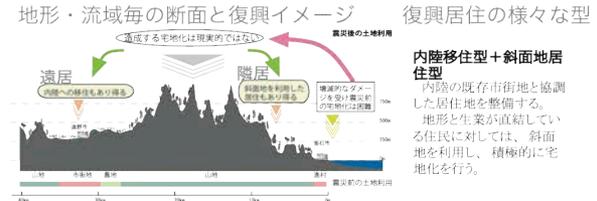


Dr. Ariga Dr. Ben-Joseph Dr. Bosselmann

### ① Rias Shoreines

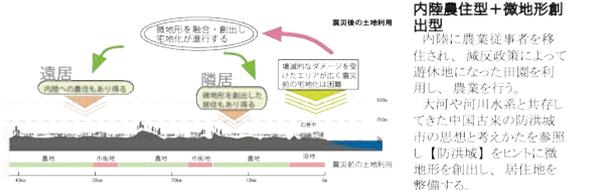
地形・流域を反映する生活再建と課題

①リアス式海岸  
海岸沿いに漁村が発達し、そこから内陸部にかけて急激に山地が見られる。壊滅的な被害を受けた海岸沿いの集落と山地を超えた内陸部とをいかに繋げていくかが重要になるのではないかと。



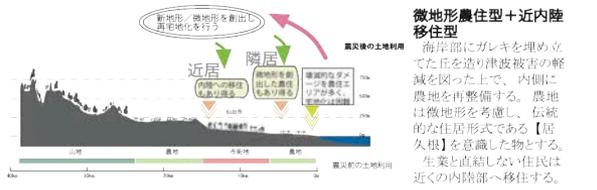
### ② River Mouth and Estuarine

②北上川流域  
河口付近には港を中心とした広大な市街地が発達し、内陸にかけて広大な流域圏に農地と市街地が面的に広がる。海沿いの港町が大きな被害を受けたが、広大な流域圏を活かした多様なネットワーク形成が復興の足がかりになるのではないだろうか。



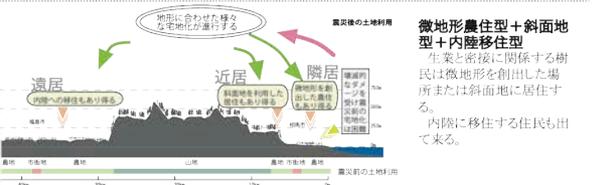
### ③ Coastal Plains

③名取川流域  
海岸沿いには農地が広がり、内陸部にかけて仙台を中心とした広大な市街地帯が広がっている。比較的被害の少なかった内陸市街地からの協力が大切であろう。



### ④ Coastal Highlands

④ - a, b, c 海岸段丘/平野地域  
海岸段丘と海岸に挟まれた平野部に農村が広がる。山を挟んで内陸部には、福島市等の市街地が見られる。海岸沿いの農地は面的に津波被害を受け、今後河口付近の農村の在り方を考えていくことが大切となるであろう。



早稲田大学・MIT・U.C.バークレーによる「地域協働の復興まちづくり」に関する緊急セッションの主催（於：米国ワシントンDC, 2011.11, 本リーディングプログラムコーディネーター）

# 都市・まちづくり研究 学会での系譜



(社) 日本建築学会

都市計画委員会 ●

## 常置調査研究委員会

[学術推進委員会](#) >>[委員会各種書式](#)

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 材料施工委員会     | 都市計画委員会     |
| 構造委員会       | 建築計画委員会     |
| 建築歴史・意匠委員会  | 農村計画委員会     |
| 防火委員会       | 海洋建築委員会     |
| 建築社会システム委員会 | 情報システム技術委員会 |
| 環境工学委員会     | 災害委員会       |
| 建築法制委員会     | 地球環境委員会     |
| 建築教育委員会     |             |

歴代委員長名簿(1963年度～)  
年度 委員長名

1963-64	高山 英華
1965-66	川名 吉工門
1967-74	浅田 孝
1975-79	大谷 幸夫
1980-82	大高 正人
1983-85	田村 明
1986-87	渡辺 定夫
1988-89	戸沼 幸市
1990-91	三村 浩史
1992-95	石黒 哲郎
1996-97	高野 公男
1998-99	高見沢 邦郎
2000-01	萩島 哲
2002-03	佐藤 滋
2004-05	鳴海 邦碩
2006-07	西村 幸夫
2008-11	小林 英嗣
2012-13	出口 敦
2014-15	有賀 隆
2016-17	鶴 心治

# 有賀研究室 研究・提案活動のメディア紹介

H22.2.20  
福島民報

(第三種郵便物認可)

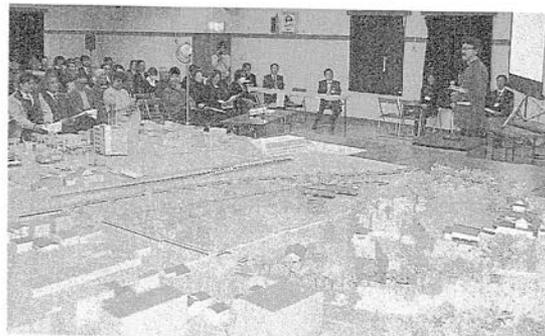
小峰城跡

## 景観づくりの在り方は セミナーで意見交換

白河駅周辺

早大大学院教授が講演

### 大型模型を展示



100分の1の模型を前に景観づくりについて学んだセミナー

景観法に基づく景観行政団体となった白河市は歴史や文化が豊く景観づくりの在り方を探るため、十八日に市内の白河商工会議所で景観セミナーを開いた。市民約百二十人が参加し、早稲田大学院の有賀教授が講演した。

有賀教授は景観は歴史や人の流れ、自然の地形などが総合的に組み合わされて形成されるとし、現在の小峰城を望む市街地からの眺

望は優れたものとした。また、総合的なビジョンのもとで残すべきもの、変えるべきものなどを判断し、全体として物語ができるようなまちづくりを進めるべきだと提言した。

会場には有賀教授の研究室が作成した小峰城跡やJR白河駅周辺の街並みを再現した百分の一の模型が展示された。

参加者は模型を間近に見ながら自分たちの住む白河市の魅力について再確認するとともに歴史に彩られた景観づくりについて意見を交わした。

## 都会から学生来る町に

永平寺町 早大と「ラボ」開設

都会の学生にとって魅力あるまちづくりを目指す永平寺町は八日、国内外都市計画やまちづくりを研究する早稲田大の有賀教授の研究室と「協働まちづくりラボ」を役場内に開設した。まちづくりを研究する

学生らが短期滞在を繰り返して、都会から地方への人の流れをつくるための課題を探り、来年三月までに解決へのアイデアを提案する。開設式には河合永充町長と有賀教授、研究室の大学院生らが出席。役場玄関に



掲げた看板を除幕して祝った。

有賀教授と学生ら九人は七日に吉峰地区の街並みや東古市地区のえちぜん鉄道永平寺口駅前にある国の有形登録文化財「レンガ館」などを視察。町職員とまちづくりについての意見交換会を十一日まで開き、九、十日の夜には両地区に出向き、まちづくり団体や集落代表ら住民とも意見を交わす。十一月と来年三月にも一週間程度滞在する予定。

河合町長と懇談した学生らは、街並み保存やレンガ館の活用方法を質問し、観光客に向けたランドマークが少ないなどの課題を指摘。河合町長は「地元では当たり前になっているものの魅力を指摘してもらい、交流で住民のハートも盛り上げてほしい」と要望した。

有賀教授は「町内に魅力はいっぱい埋まっているのが分かっていく。町や住民と協働で、次世代に受け継ぐ仕組みや活動づくりに取り組んでみたい」と意欲を語った。(中田誠司)

(第三種郵便物認可)

日 刊 県 民 福

協働まちづくりラボの看板を除幕して握手する有賀教授(左から二人目)と河合永充町長ら。永平寺町役場

facebook

メールアドレスまたは電話番号 
パスワード

アカウントを忘れた場合

ARIGA LAB × EIHEIJI MACHIZUKURI PROJECT  
**永平寺町まちづくりプロジェクト**  
W 早稲田大学 有賀隆研究室

早稲田大学 有賀隆研究室 永平寺町プロジェクト  
@arigalab.eiheijipj

**ホーム**

レビュー

ページ情報

写真

投稿

コミュニティ

ページを作成

**レビュー**

早稲田大学 有賀隆研究室 永平寺町プロジェクトにはまだレビューがありません。

ご意見をお聞かせください

★★★★★

すべて見る

**写真**

## ARIGA LAB × EIHEIJI MACHIZUKURI PROJECT

# 永平寺町まちづくりプロジェクト

すべて見る

**投稿**

**コミュニティ**

33人が「いいね！」しました

33人がフォローしています

**基本データ**

Contact 早稲田大学 有賀隆研究室 プロジェクト on Messenger

コミュニティ

**ユーザー**

「いいね！」 33件

**これもおすすめ**

2017年 山梨県小菅村 イ地域団体

TsB オリエント吹奏楽団 団体

2017年 新潟県小千谷イン 地域団体

日本語 · English (US) · Español · Português (Brasil) · Français (France)

プライバシー · 規約 · 広告 · AdChoices

その他 · Facebook © 2018

早稲田大学 有賀隆研究室 永平寺町プロジェクトのその他のコンテンツをFacebookでチェック

ログイン

または

新しいアカウントを作成

facebook

メールアドレスまたは電話番号 
パスワード

アカウントを忘れた場合

ARIGA LAB × EIHEIJI MACHIZUKURI PROJECT  
**永平寺町まちづくりプロジェクト**  
W 早稲田大学 有賀隆研究室

早稲田大学 有賀隆研究室 永平寺町プロジェクト  
@arigalab.eiheijipj

**ホーム**

レビュー

ページ情報

写真

投稿

コミュニティ

ページを作成

**レビュー**

早稲田大学 有賀隆研究室 永平寺町プロジェクトにはまだレビューがありません。

ご意見をお聞かせください

★★★★★

すべて見る

**写真**

## ARIGA LAB × EIHEIJI MACHIZUKURI PROJECT

# 永平寺町まちづくりプロジェクト

すべて見る

**投稿**

**コミュニティ**

33人が「いいね！」しました

33人がフォローしています

**基本データ**

Contact 早稲田大学 有賀隆研究室 プロジェクト on Messenger

コミュニティ

**ユーザー**

「いいね！」 33件

**これもおすすめ**

2017年 山梨県小菅村 イ地域団体

TsB オリエント吹奏楽団 団体

2017年 新潟県小千谷イン 地域団体

日本語 · English (US) · Español · Português (Brasil) · Français (France)

プライバシー · 規約 · 広告 · AdChoices

その他 · Facebook © 2018

いいね! コメントする

益尾 孝祐さん、栗田 千鶴さん、藤見 博典さん、他7人が「いいね！」しました。

シェア1件

いいね! コメントする

伏木 航平さん、今 優華さん、永野 梨さん、他4人が「いいね！」しました。

シェア1件

早稲田大学 有賀隆研究室 永平寺町プロジェクトのその他のコンテンツをFacebookでチェック

または

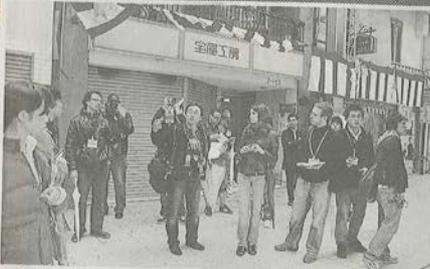
# 唐津焼 東京で競

市々の中堅・草陶芸家による展覧会「二〇〇〇 唐津焼のいま」が東京で開かれている。入京作家たちの競演は東京では初めて、古唐津の伝統と新たな作風の作品が一堂に並び、個性豊かな現代の唐津焼を堪能できる。

日本陶磁協会の森孝一主任研究員が「一年前、不況で産地が廃上がっていかない、刀をわけて発信していく旗を掲げてみては」と、東京で個展を

22.3.20

## 唐津城や商店街の魅力探る



都市デザインワークショップで、中心商店街を調査する学生たち。唐津市員服町

### 16都市デザイン学ぶ 力国の学生集う

#### 23日、公開で提言発表

フランスでは、2グループに分かれ、中心商店街の各アケドを再開発される全口の時、唐津市民会館でバスセンタービルを見学。田高取郎や唐津城などの文化遺産も訪ねて回った。

フランス出身の男性「城」という貴重な遺産をもっと生かした、町が発展できるプランを考案したい」と意欲的に話した。(富里)

唐津市 建築を学ぶ白本インドを16カ国約40人の学生による「国際建築都市デザインワークショップ」が唐津市で開かれていた。専門の視点から歴史や文化を生かした、歩きながら唐津一を提案するために、学生らは23日まで唐津に滞在、実際に唐津の街中を歩いて地域の魅力を探っていた。

店以上が応援

川市美 中川員坊 中津本龜 濱崎節夫 浜本 喜好 丸田宗彦 吉野 靖義

14代中里太郎右衛門 茶わんや花壇 陶人形 人の丹文飛は、故3代 など14点を展示 粉の青に刺さされたという 唐津、奥高麗などの多様な 象、彫、木土平さんの黒 ャラリーで21日まで。

## Circoscrizione 2/ Corso Orbassano

# I progetti del Poli per la nuova piazza di Mirafiori



MIRIAM CORGIAT MECIO

Piazza Mirafiori dovrebbe sorgere all'incrocio tra i corsi Settembrini e Orbassano, al centro di due aree - quelle ex Fiat gestite da Tne e quella compresa tra strada del Portone e corso Tazzoli - al centro di importanti progetti di riqualificazione. Nascerà così una nuova «porta d'ingresso» a Torino: ma come apparirà? In queste settimane se lo stanno chiedendo i partecipanti al workshop organizzato dal Politecnico in collaborazione con la Waseda University di Tokyo: 15 studenti giapponesi e dell'ateneo torinese che stanno provando a immaginare non solo il futuro della piazza, ma anche delle aree circostanti. A coordinare il workshop sono i professori Lorena Alessio per il Politecnico e Takashi Ariga dell'ateneo di Tokyo.



Come sarà Ecco il rendering di uno dei progetti per riqualificare l'area compresa tra i corsi Orbassano e Settembrini

Insieme a loro e a una serie di esperti gli studenti hanno fatto alcuni sopralluoghi nell'area elaborando una serie di progetti che immaginano l'arrivo di nuove linee di trasporto pubblico, aree espositive, parchi e negozi. Elementi che dovrebbero trasformare questo angolo di estrema periferia in un «gate» attrattivo e facilmente identificabile. Le soluzioni presentate sono molto eterogenee. Un gruppo immagina una «torre» che diventi il simbolo della nuova piazza, ma anche ampie aree verdi e un sottopassaggio in corrispondenza di corso Orbassano. Un secondo ha progettato lo spazio tra i corsi Orbassano e Settembrini come uno snodo di trasporti, dove si uniscono su diversi livelli metro, tram e automobili, ma anche spazi di co-working, ristoranti e terrazze. Tutti gli elaborati verranno presentati domani ai rappresentanti delle istituzioni coinvolte nel progetto - dal Comune a Torino Nuova Economia - nonché a diversi professori e professionisti torinesi.

22.3.2

19日午後5時50分、唐津市北波多徳須恵の国道2号で、大型バスが乗客を乗せ、バスを乗客10人と軽自動車運転していた男性(48)が、バスが長崎県平戸市から福岡市へ向かう途中だったという。同署で原因を調べている。

ね、協定書に親印。土田理事は「字交の裏を決めるのみ

春の高野野球 大宮城の初見、40

# 東北歴史まちづくりサミット 1m白河 2016

別紙



白河小峰城

平成28年11月10日(木)

13:00~16:40(開場12:30)

入場無料

白河文化交流館(コミネス)小ホール [白河市会津町1-17]

## ○基調講演

早稲田大学大学院 創造理工学研究科  
建築学専攻 教授 有賀 隆 氏

## 有賀隆教授 プロフィール



・早稲田大学理工学部建築学科卒業、カリフォルニア大学バークレー校大学院博士課程修了(Ph.D.都市計画・環境計画研究)。  
・地域協働まちづくり、都市の形態・機能変容(セルフオーガニクス)、住環境設計、都市計画論に関する研究と実践が専門。  
・日本都市計画学会(GPL)理事、日本建築学会(AU)前理事・前都市計画委員長、白河市「歴史的風致維持向上計画協議会」会長、同「景観審議会」委員、東京都「景観審議会」委員、川崎市「景観審議会」委員、杉並区「まちづくり景観審議会」会長歴任。  
・著書に「震災後を考える東日本大震災と向きあう92の分析と提言」(分担)、「まちづくりデザインのプロセス」(共著)、「地域と大学の共創まちづくり」(共著)、「景観法活用ガイド」(分担)など多数あり。

## ○パネルディスカッション

歴史まちづくりに取り組む 7市町  
(弘前市・白河市・多賀城市・鶴岡市  
・国見町・磐梯町・桑折町)

※歴史まちづくり計画認定順

参加ご希望の方は、下記事項を記載の上、Eメール又はFAXにてお申し込み下さい。

### ■記載項目

①氏名(ふりがな) ②住所(市町村名のみ) ③申込区分(個人・会社・団体・行政関係・その他) ④連絡先(電話、携帯電話、E-mail等)

### ■事前参加受付

白河市 建設部 都市政策室 まちづくり推進課  
E-Mail [machi@city.shirakawa.fukushima.jp](mailto:machi@city.shirakawa.fukushima.jp) FAX 0248(24)1854

### ■申し込み期限 平成28年11月4日(金)

### ■当日参加「可」

※お申し込みの際にいただいた個人情報は、当シンポジウムの申込みのためだけに使用し、その他の目的に使用することはありません。

◎ご来場の方に「南湖公園 専売券」の無料入場券を配布いたします。

(有効期限 H28.11.10~H28.11.30)

主催 / 国土交通省東北地方整備局・白河市  
共催 / 弘前市・多賀城市・鶴岡市・国見町・磐梯町・桑折町  
後援 / 福島県



アクセス  
○白河駅より徒歩20分  
○新白河駅より徒歩7分  
○白河駅より徒歩5分  
○白河駅より徒歩3分

# 山口のまちづくり デザインを考える

9/23

火曜日

中市コミュニティホール Nac  
1階多目的ホール

参加無料・予約不要

第1部 記念講演 13時 - 14時

有賀 隆 教授



早稲田大学創造理工学部建築学科 教授  
日本建築学会理事、同学会代議員、  
同学会都市計画本委員会委員長

第2部 成果発表会 14時 - 17時

本発表会では、5大学(山口大学、早稲田大学、関西大学、広島大学、九州大学)から集まった建築・都市設計を専門とする学生・講師が、山口市中心市街地のまちづくりの将来像について、  
①調査や議論を重ね、  
②まちづくりのテーマを発見し、  
③図面や模型などを用いたまちづくりの計画・デザインを提案します。

9月17日から23日までの7日間、「オアシスどうもん」にて、学生が図面・模型の製作作業をしています。20日15時より、中間発表を行いますので、ご自由にご参加ください。



会場：中市コミュニティホール Nac 1階多目的ホール

住所：山口市中市町 3-13

(共催)

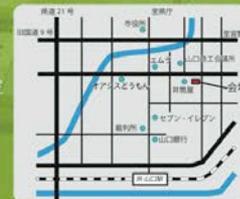
山口市  
山口大学都市計画・都市設計研究室

お問い合わせ先

電話：0836-85-9729

担当：小林(山口大学工学部)

メール：taki210@yamaguchi-u.ac.jp



# 有賀隆 メディアを通じた海外発信

YOMIURI ONLINE | 読売新聞

早稲田大学の教育・研究・文化を発信  
WASEDA ONLINE

2017/10/19

Society:Opinion:WASEDA ONLINE

Planned by The Yomiuri Shimbun Advertising Bureau [PR]

The Japan News by The Yomiuri Shimbun

WASEDA ONLINE

RSS JAPANESE



Top Opinion News Research Culture Education Campus Now Reviews

Home > Opinion > Society

Opinion

Tweet Like 0

Society

## Facing an era of a decreasing population and population aging Building communities that people will continue living in



Takashi Ariga

Professor, Graduate School of Creative Science and Engineering, Waseda University

### The idea of building communities that people will continue living in and issues faced

Japan has faced the social issues of a decreasing population and population aging for quite some time. For example, it is important to consider residential policy for regional cities in an integrated manner with urban planning that will lead to the rebirth and revitalization of central urban areas, and when implementing these measures gaining the cooperation of people through local networks is essential. In addition, it is also important to implement the formation of compact urban areas through control of land use in the suburbs and consolidation of functions in the urban center in a manner that is integrated with urban reorganization for that purpose.



Photo 1. Traditional house with beautiful garden trees and a group of modern high-rise apartments surrounding it

In the past, the sphere of living was formed with its basis on social human relationships such as regional ties, blood ties, and work ties. Meanwhile, in modern society, the scope of living by people and consumption and economic activities have expanded complexly beyond municipalities and built-up areas based on various living styles and changing life stages, and the sphere of living has been formed as these elements overlap. However, ideas for the spatial image and future targets of community building in response to the diversification of living styles and changing life stages in this modern network-based civil society have not been shared throughout regional areas.

While the building of communities that people will continue living in to be led by local residents and local landowners should be conducted in an integrated manner with the urban planning and community building measures implemented by municipalities, this is not always necessarily the case in reality. For example, while the construction of high-rise apartments and the development of small detached houses in the inner-city areas of regional cities can be considered as a positive development from the perspective of increasing the population of inner-city areas, it is not really consistent with the real purpose of community building that consists of the rebirth of the surrounding living environment and improving the attractiveness of central city areas, and for this reason such measures can hardly be deemed to lead to true regional rebirth and urban district revitalization. Normally cities must have accumulated many local resources such as the natural environment, the historical and cultural environment, and the social welfare and educational environment that can make significant contributions to the renewal and improvement of living environments in cities, if effective social investments are made. From this perspective, it would be socially significant to consider the various resources that have been accumulated in regions in terms of building living environments and to work to restore the value of these resources.

### Creating new value with living environment resources and incorporating them in community building

In the restoration of apartment complexes that has been implemented in areas such as building developments in the

ホーム > オピニオン > 社会

オピニオン

ツイート いいね! 2

ツイート いいね! 2

▼社会

## 人口減少・高齢化時代に立ち向かう 住み続けるためのまちづくり

有賀 隆 / 早稲田大学大学院創造理工学研究科教授



有賀 隆 (ありがが たかし) 早稲田大学大学院創造理工学研究科教授 略歴はこちら

### 住み続けるためのまちづくりの視点と課題

わが国で人口減少と高齢化が社会問題となって久しい。例えば、地方都市のまちなか居住の施策は、中心市街地の地域再生や活性化につながる都市計画と一体的に考えられることが重要であるし、その実践に際しては地域のネットワークを通じた担い手の協働が欠かせない。また郊外の土地利用のコントロールと都心への機能の集約化を通じたコンパクトな都市像の形成も、そのための市街地再編と一体的に進めることが重要である。



写真-1 立派な庭木を持つ伝統的住宅とそれを取り巻く現代の高層マンション群

かつて人々は地縁、血縁、職縁など社会的な人間関係を基に日常生活圏を形成してきた。一方現代社会では、様々な生活スタイルや変化するライフステージに応じて、市民の暮らしの範囲や消費・経済活動は自治体や既成市街地を越え複雑に広がりが、これらが重なり合いながら生活圏を形づくっている。しかし、こうした現代のネットワーク型市民社会における生活スタイルの多様化や、ライフステージの変化に対応できるまちづくりの空間イメージや将来目標が地域全体で共有されているとは言い難い。

地域の市民や住民地権者が主体となる住み続けるためのまちづくりは、市町村が進める都市計画やまちづくりの施策と一体的なものとして行われるべきであるが、実態としてはどうかだろうか。例えば地方都市の都心部で進む高層マンション建設やミニ戸建で開発は、都心人口の増加という一面で評価される一方、周辺の居住環境の再生や中心市街地の魅力化という本来のまちづくりと一体的な関係を築けず、その意味で真の地域再生や市街地活性化につながっているとは捉え難い。都市には本来、有効な社会投資が行われれば市街地の住環境更新や改善へ大きく貢献するような自然環境や歴史・文化環境、また福祉・教育環境など多くの地域資源が積み重ねられているはずである。これらの点から見れば、地域に蓄積されている様々な資源を住環境まちづくりに位置づけ、その価値の再生を進めることは社会的に重要な意味を持つものである。

### 住環境資源の新たな再価値化とまちづくりへの反映

近年、首都圏の住宅団地などで進められている団地再生では、高度経済成長期に建設された住棟の耐震補強や改修と並行して、住戸ユニットのコンバージョン（用途転換）を通して、若者向けシェアハウスや、貸し菜園付き住宅、また高齢者向けの小規模多機能型福祉サービスを併設した賃貸住宅など、多様な生活環境をミックスして、従前の団地の再価値化を図る取り組みが成果を上げている。これらは、個性的な生活スタイルに対応する住環境再生へ向けたまちづくりの方法としても有効である。

What's New!

- Asian Food Culture—New Cuisine Born Out of Diversity
- 10,000 Kilometers Across Africa —Yoshiro Sekine and the African & Mayan Collection—
- Creation of Reconciliation Studies Working toward a Shared Civic Awareness for Resolving the Problems of East Asia
- Delving into the Truth of Idealism and Realism through Kantian Philosophy
- Formation on Integrated Maritime Law Research and Education Center Working through the Joint Effort of Industry-Academia-Government
- Waseda's Tsuguru Shamisen Circle – "Traditional Japanese music, with a rock twist"
- Gustave Courbet in 21st-Century France and Japan

CAMPUS NOW

The latest title! Spring Verdure Issue (May, 2015)

It introduces the latest information of Waseda University five times a year. [Index]

YouTube WASEDA University

- Experience the graceful world of "Four Seasons in Genji" in 360VRx3D
- Seasons of WASEDA Summer
- Seasons of WASEDA Spring
- Presenting the "WHY WASEDA?" video: Why Waseda? Why Tokyo? The answers in 3 1/2 minutes
- Dancing through Waseda in watercolor, animation by ShiShi Yamazaki
- Waseda Topics 2015-2016

# 国際ジャーナル掲載論文(一例)

2018/1/22

built-heritage VOLUME 1 (2017)

**BH BUILT  
HERITAGE**

HOME | ABOUT US | CONTENT DOWNLOAD | DISSEMINATION | SUBMISSION | CONTACT

## Volume 1 (2017)



### BUILT HERITAGE

25 March 2017

Vol. 1, No. 1  
Inaugural Issue

ACCESS TO CONTENT



### BUILT HERITAGE

25 June 2017

Vol. 1, No. 2

ACCESS TO CONTENT



### BUILT HERITAGE

25 September 2017

Vol. 1, No. 3  
Special Issue:  
Global and Local Challenges in Non-Western Heritage Conservation

ACCESS TO CONTENT



### BUILT HERITAGE

25 December 2017

Vol. 1, No. 4

ACCESS TO CONTENT

## Acknowledgement to the Reviewers

Administered by  
Ministry of Education of PRC

Co-sponsored by  
Tongji Architectural Design (Group) Co., Ltd.  
Shanghai Tongji Urban Planning and Design Institute  
Aecplus Group P.L.C.  
World Heritage Institute of Training and Research for the Asia and

## Contemporary Currents in Japanese *Machizukuri* (Citizens Collaborative Community Improvements and Management) and Their Socio-Cultural Meanings\*

Takashi Ariga

Department of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Tokyo, Japan  
Email: tariga@waseda.jp

**ABSTRACT** This paper studies the contemporary attempts of Japanese *Machizukuri*, Citizens Collaborative Community Improvement and Management, and their socio-cultural meanings in order to shed light on the sustainable planning approaches dealing with population ageing and decreasing. In recent years, as response measures for non-physical local issues such as environmental problems and welfare, and with the aim of further enhancing community-centred planning capabilities against a background of decentralisation in various fields and the establishment of civic society, new cooperative/collaborative-style planning theory is being deployed. Through this process, community improvement and management is becoming deeper, in terms of technology, systems, and technique. The study attempts to find out a solution to real-world problems—how to construct a comprehensive planning theory based on spatial and social challenges arising in modern civic communities, with local resources, social capital and systems that have resulted from such issues. It also seeks to show how to achieve a vision for the city as a whole by mutually compiling individual community improvement and management scenarios and programs, based on the autonomous determination and future vision of the organisations and residents that play leading roles in the community.

**KEYWORDS** *Machizukuri*, citizens collaborative community improvement and management, civic society, local resources, social capital and systems, interactive scenario making

Received July 24, 2017; accepted August 21, 2017.

## Outlook on Community Improvement and Management

Community improvement and management is a dynamic process in which the organisations that make up a local community play a leading role, and which reflects the position of the various inhabitants and users over the course of time from past to future. The focus is on familiar living environments and everyday urban built environments. An ideal vision of the community to be shaped is defined by 'editing' the interrelationships between diverse spatial elements and social environments through a step-by-step process. A direction for the use of unique materials and resources to be synthesised is defined in order to realise the vision.

\* This paper is a rewrite of 'Improvement and management of Community Management Theory', (Ariga 2010) with additional content included.

Community improvement and management focuses on the places and environments that are unique to the locality, the lifestyle and livelihoods there, and the qualities of history and culture passed down through the people of the area. Its activities result in the creation of spaces and physical environments. Future directions are found within the interrelationships between local elements, leading to the revival of places and the reconstruction of spatial environments through a systematic integration of multiple plan elements and resources in a general direction. Local traditional industries, unique townscapes and landscapes, places handed down for people to live in, and traditions preserved in local lifestyles all serve as elements of community improvement and management. These contextual and traditional value resources play a role in the plan to make the vision of the future a reality.

In recent urban and city-centre revitalisation projects,

# 有賀隆 早稲田建築学報巻頭言

## 「創発」の建築・都市デザイン 有賀 隆

### 1. 地域主権と市民社会時代の建築・都市デザイン

地域主権と市民社会の時代と言われて久しい。国から自治体への分権が進み、都市計画の権限の多くが市町村などに移譲された。いまや自治体は市民や地域社会との協働を抜きにしては目指すべき将来の都市像を実現する事は難しいし、その反対に都市づくりの目標を広く地域社会や市民、住民と共有化し、実現へ向けた地域連携と市民協働のプロセスを明確に進める事で、地域固有の資源や特徴を活かした都市づくりを持続的かつ戦略的に進める事が可能になった。地域社会側には住民や市民、様々な分野の専門家等による市民活動組織やまちづくりNPOが作られ、自らの地域に固有の課題やコミュニティに共通して求められるテーマに取り組むなど、非政府、非営利型のまちづくりの担い手として大きな役割を果たしている。明治期、近代国家としての都市づくりを目指して形作られた我が国の都市計画制度は、その後の震災や戦災の復興事業を経て、主に街路、橋梁、河川・運河、港湾、鉄道、公園などいわゆる社会基盤施設や公共施設整備の整備、また公的住宅建設と供給等の側面で重要な役割を果たしてきた。さらに戦後の高度経済成長期以来続いてきた都市部への経済と人口の集中に対しては、当時の住宅公団によるニュータウン開発や地権者組合などによる土地区画整理事業を用いた住宅系市街地の開発など、都市の面的拡大をモデルとした整備、開発が続いてきたのは周知の事である。こうした時代、都市計画は国を中心とした中央集権型の体系として全国共通の計画制度と事業手法によって進められる事が効率的かつ平等であったし、事実に多岐の自治体において人口増加を前提とした区域区分の設定や土地利用計画の策定など、拡大モデルに基づく行政都市計画が進められてきたのは周知の事である。

### 2. 建築・都市デザインの現代的課題と方法

こうした市民が主体となった地域づくり、まちづくり活動には、自治体の地理的範囲にとらわれない広域を対象にした環境問題、資源問題、景観問題、交通問題などに取り組むものや、他方、身近なコミュニティを対象に地域の環境学習や文化振興、福祉・介護のまちづくりなどを行い、住民、利用者により近い立場で活動を担うものなど、幅広いテーマで協働するまちづくり手法を見る事ができる。こうした市民まちづくりの活動ではそれぞれのテーマやフィールドに密着した専門家や市民リーダーの果たす役割は大きい。地域社会の内から湧き上がる多様な市民活動とそれを先導するリーダーは、かつての地縁や職縁、血縁などに支えられた

町内会や自治会単位の活動とは異なるものであり、行政にとってみれば市民組織との連携や協働の仕組み、お互いの役割分担をどのように計画するか、いわば協働の仕組みのデザインについてもその力量が問われるものである。

こうして見ると、地域主権と市民社会の時代の都市・地域づくりには以下のような視点から取組みテーマや課題を捉えていく事が求められると言える。

#### (1) 都市・地域空間を再生、創造するデザイン

いずれの都市も地域固有の歴史や文脈から離れてまちづくりを進める事はできない。既存の都市空間や物的環境に内在する様々な資源を発見、再生し、そこに市民、地域社会が主体となる持続的なアクティビティやコミュニティ活動を通じた新たな価値、機能を付加して、一つ一つのまちづくりを進める、いわば「一品手作り」の活動と、それらをまち全体の都市像に編んでいく「相互編集」のプロセスが求められている。こうした視点から、まちづくりのテーマ、課題を捉える。

#### (2) 自然環境を保全・再生するデザイン

都市の環境はその地域に固有の風土、そしてその風土を活かしながら先人達が暮らし、耕し、作り上げてきた人間活動人間活動に必要な都市基盤や建物、さらにそこで生まれる社会、経済活動を支える制度や仕組みなどの総体として捉える事が重要である。なかでも自然環境は、現代社会にとっては資源の再生、エネルギーの循環、食料の生産、廃棄物の処理など都市活動と密接に関わり、将来への持続可能な社会の維持に不可欠な要素である。こうした視点から、まちづくりのテーマ、課題を捉える。

#### (3) 地域経済を再生・振興するデザイン

「新しい公共」としてのコミュニティビジネスの創出や、地域ブランドづくりのためのまちづくりの拠点と多主体連携の仕組みづくり、また新たな土地利用の創出を契機とした地域産業の構造転換や新産業の創造など、これまでの地域の潜在的資源を活用しながら、新たな人材や知的資源の集積を通して経済再生を実現していく地域経営からみたまちづくりの役割は極めて大きいと言える。こうした視点から、まちづくりのテーマ、課題を捉える。

#### (4) 「創発」デザインの担い手を育成する取組み

地域社会や市民、住民が主体となる現代まちづくりでは、活動テーマに関する知識を持った市民や、地域の情報、人材、財源などの面から活動を支援する主体など、多様な関係者が様々なまちづくりのプロセスに応じて、様々な連携や協働を作っていく。こうし

たまちづくりを担っていく仕組みや組織、人材は、地域社会の中にあ定的に作られる事で、より持続可能な取組みへと発展するのである。そのためにはまちづくりの担い手づくりの支援が不可欠となる。こうした視点からまちづくりのテーマ、課題を捉える。

### 1-2 建築・都市デザインのプラットフォームへの期待

現代の建築・都市デザインがコミュニティ固有の課題に密着した取組みの場合、地域側に計画・設計を持続的に推進する組織や仕組みが形成される事は、公共性が高く多様な主体が関わって長い時間をかけて実現していく社会的な建築・都市デザインを継続していく上で極めて重要な事である。また実現のプロセスでは、テーマに関連した分野の専門家等から計画策定に必要な技術や人的資源の支援を必要とする場面も少なくない。またこのようなまちづくりの取組みはそれぞれが固有のテーマに基づくだけに、一つ一つ手作りによるオーダーメイドである事が多く、他のまちづくり活動との相互連携や周辺への波及効果などを生み出しにくい事もある。そこで、一つ一つの魅力的なまちづくりの取組みを相互に関連づけ、より広域の都市全体の目標像に近づけていく「建築・都市デザインの『相互編集集』」の枠組みと、実践のための社会的な連携・協働の仕組みとなる「建築・都市デザインの『プラットフォーム』」の構築が重要になってくる。プラットフォームは、いわばまちづくりを実践する地域社会の中に形作られる主体間の連携・協働の場であり、そのための仕組みとして機能するものである。

建築・都市デザインのプラットフォームの特徴を以下に整理しておこう。

- (1) 市民、住民、地域社会が主体となる計画・設計を支援する仕組みである。
- (2) 地域住民と専門家、事業者、行政との連携・協働を実現する情報・知識の提供、計画技術・手法の提供、またそれらを通じた建築・都市デザインの提案、事業の実施、誘導、支援などを行う。
- (3) 地域社会のニーズを発見する方法で見出し、デザインの目標やプログラムの検討、立案に対する専門的支援を行う。
- (4) 建築・都市デザインに関わる多様な専門家、研究者が日常的なネットワークを構築することで、市民、住民のまちづくりのニーズに幅広く対応する。
- (5) 建築・都市デザインの地域側の担い手として、自ら具体的、実践的な提案、取組みを行い、財源、組織、人材面で行政からの

自立を図るとともに、対等な立場でまちづくりに関わる。このように市民、住民、地域社会が主体となって、自治体行政による都市計画や地域企業の社会貢献活動とも連携・協働に基づく役割分担を行いながら、参加者自らが地域まちづくりの担い手として継続的に活動を実践し、さらにそうした個々の取組みを相互に結びつけて地域全体へと広げていく「まちづくりプラットフォーム」への期待が一層高まっているのである。

### 1-3 「創発」が拓く新しい建築・都市の空間像とその方法

現代都市の建築・都市デザインが、多様な社会像や生活像を背景に、それぞれの地域で自らのまちの魅力や活力を自律的に更新、改善しながら、それらが相互に関連し合って都市としての全体像を組み立てていく、いわば新しい公共を形作る社会的な協働の仕組みである事は既に述べた。ここで重要なことは、地域毎の特徴を活かした「自律的な創造性」、多様な主体間による議論・討論や合意形成、意思決定の中から新しい価値や空間像が創造される「漸進的な革新性」、そしてそれぞれの特徴的な取組みが孤立的に自己完結するのではなく、都市環境全体の質や多様な意味・機能を合わせ持つ多面的な都市空間として編集されていく「協調的な多様性」を可能とする仕組みでなければならない事であろう。私たちはこのような認識に立ち、市民、住民、地域社会が主体となるこれらのまちづくりの在り方を「共創のまちづくり」として位置づける事とする。

「創発」の考え方は、近年、建築、都市計画以外の分野でも用いられる概念となってきた。例えば工学分野では「共創工学研究」(出典：東京大学人工物工学研究センターホームページ、<http://www.race.u-tokyo.ac.jp/~raceweb/research/cocreation.html>)として、多様な価値観によって成り立っている現代の都市社会において、これまでの工学的な合理性と最適解の考え方に基づいて形作られてきた人工物、人工環境のシステムの限界を課題と捉え、これに対して「人」、「人工物」、「社会」の三者による相互の干渉、影響を考慮した新しい「共創的人工物工学」(引用：同上)の方法論の獲得を目指し、大学と民間企業とが協働で研究を進める取組みが進められている。このなかでは「人工物と人工物」、「人」と「人工物」、「人」と「人」、「組織」と「組織」、さらに異領域間の多様な関係性に着目し、複雑かつ予測困難な状況下での意思決定の下での人工システムの創出や人や環境との発展的関係の実現を目指す事が記されている。専門分野は異なるにしても、現代社会を

# 有賀隆 早稲田建築学報巻頭言

## 市民社会が創り出す 生態有機都市の思想と計画

1990年代以降、この20年間は地方分権と地域主権の観となる市民社会の制度と仕組みが形づけられた時代であり、これと歩み同じして、地域社会が主体となる多くのまちづくりが試行錯誤を繰り返しながら実現されてきました。地域自らが将来の望ましい都市像を選択し、多様な計画と事業のアプローチを連続的に組み立てながら市民共創のまちづくりが成果をあげてきた時代とも言えます。この時代、早稲田の建築・都市計画は市民参加と地域主体のまちづくりを新しい公共を担う社会制度として広める上で重要な役割を果たしてきました。とりわけ阪神・淡路大震災後の復興過程と、その時代に各地で進められたまちづくりのプロセスでは、地域に根ざした取り組みに関わりながらコミュニティのまちづくり制度やその担い手、また事業に関わる研究と実践活動を通して多くの社会貢献を果たしてきました。さらに昨年発生した東日本大震災後、現在進められている復興まちづくりでは、東北の過疎集落や人口縮減に直面する被災地域での市街地拡大を伴わない復興と、自然の力に任せようとする人間居住地の再建への具体的まちづくりが求められていて、これまでに経験したことのない長期的で広域的な地域復興の課題に応えるべく、被災地の自治体や住民の方々と協働で復興まちづくりの支援に取り組んでいます。

さてわが国の都市問題をひとりで表せば、それは国土の狭小なエリア(市街化区域は約3.8%)に多くの人口と社会・経済活動が集中するいわゆる人間活動の問題と言えます。高度経済成長以降、20世紀の人間活動の急激な影響で、都市が成立し機能するための諸活動が自然環境や生態系システムに対して無視できない大きさの影響を与え始めていることがその主因であり、まさに今、自然・生態環境(Natural-ecological Environment)、人工的物的環境(Built Environment)、社会経済環境(Socio-economic Environment)が相互持続できる都市の形と、それを實現する地域社会のガバナンスの形を築き上げるのが急務であると言えます。大規模地震や豪雨などの自然災害に極めて脆弱な都市環境や居住地、人の健康を害する恐れのある環境汚染への懸念、あるいは

は住民高齢化と人口減少の急激に招く地域社会の共同意識の低下と居住環境の不安定化、農地や宅地の生産的な放棄など、長期、短期双方から見た都市や地域の在り方と計画の諸課題に根本から向き合っており、地域ごとに固有の生態系や自然環境との密着関係を直し、その成果を地域再生や都市空間の更新の具体策へとワードパッシングさせる建築・都市計画の思想と方法が社会から強く求められています。

都市は物的・空間的環境であると同時に、地球環境を生き抜く人の知恵、社会の記憶、自然の仕組みが重層した場ととらえることができます。都市における人間活動は従って、それ自身が地域の生態系や自然環境の仕組みと密接に関わる一部です。こうして見ると、都市を含む生態系は多数の要素が絡み合い、相互作用しながら一つにまとまっている複雑系と見られます。複雑系として要素からは予測できないような全体性が出現したり、微細な場所や空間の変化が都市全体の激変を起すこともあります。都市を構成する基盤施設や個々の建物は多様であるとともに、それぞれが固有の形態や機能を持って、自律的に変化、更新する一方で、都市として周辺と連続した空間を構成しつつまとまった社会空間を形成しています。そこには最も重要な基盤となっている自然環境があり、その上に人が社会の営みを通して構築してきた人工環境が重ねられ、人間居住や都市活動のガバナンスの仕組みとしての社会環境が成り立っているのです。

## 都市計画と生態系・自然環境との 多層的なつながり

自然環境との応答を通じた都市設計や居住地計画は、その時代に求められる都市計画の思想の変遷や、科学技術の進歩による生態系への理解の深化とともに発展してきました。わが国の多くの都市計画家たちが、理論と実践の両面を通して自然環境と応答する生態学的な都市計画のアプローチを模索し、そのうち土地開発整理事業などを通して実際の居住地として具体化されたものも少なくありません。

石川栄福は戦前の名古屋時代、1923(大正12)年に1年間の視察旅行でイギリス、アメリカ、ノルウェー、フランス、オーストリアを訪問し、1924年

の第8回IFHP国際会議(アムステルダム)に出席して、レイモンド・アンウォンから多くの影響を受けています。この洋行から帰国後、1926年に記された「区画整理設計室手記」(1926、1928年)では、居住地の計画において有機計画や正統地設計画、用途地域別計画が重要であることが著され、個々の都市施設を相互に関連させて地区全体が有機的につながる包括計画を目指しています。後に石川自ら関わった土地開発整理事業の設計を個性的なものへと磨き寄せた基礎であったと言えるでしょう。

人間居住の場である都市の在り方に関して、土地の個性を活かした生態系とも応答する有機主義的な都市の設計思想として著された石川の考え方は、東日本大震災という巨大災害を経験した今、これからの建築、都市計画に求められる思想と方法に対して多くの示唆を与えらるるものです。現代都市が周辺に広がる耕作地、里山、自然水、水系、集落地帯ともに相互影響しながら広域的な地域環境を構成していることは言うまでもありません。しかし、こうした現代都市に対応する都市計画の方法論やまちづくりの体系、またその実践手法や情報も、多様な生態系や自然環境との相互影響を反映する社会技術にはまだ到達していないのが現実です。わが国の都市の多くは近代化のプロセスで大規模な人口集中と社会経済活動の集積を受け止めるため、規模の拡大と土地利用の合理的な分化、そして空間の経済的有効活用を最適化する都市像を目標として、改造や再編が繰り返されてきました。都市を構成しているそれぞれの地区が個々に完結した空間の姿と社会経済的な役割を持ち、それらが混在しながら地域全体の環境を形成していて、そうした「混在都市空間」が歴史の中で変容や更新を繰り返すこと、またグローバル化した都市間競争の中で経済的な価値を生産し続けるために常に改造され続けていることも特徴としてあげられます。しかし時として、個別の地区の空間や環境が、地域固有のあるべき環境の姿と緊張的、あるいは不調和な関係に陥ることも多々あり、そうした都市の「激変」や「復元不可な影響」を回避しながら、都市が魅力的かつ革新的に成長していくためには柔軟かつダイナミックな都市計画の方法が求められているわけです。「自然環境・生態系のシステムと都市空間・社会経済活動・市街地パターンとの相互関係を示し、地域環境の戦略的な評価(アセスメント)へと具体化する計画」が必要なのです。私はこれを「生態有機都市」のデザインとして、新しい都

市設計・計画の思想、方法論として体系化することが重要であると考えています。

## 自然環境と応答する地域マネジメントの 有機的な計画アプローチ

都市が生態系や自然環境と共生可能であるべきとの議論は、その国や地域ごとに異なる様々な方法で都市計画に反映されてきており、それぞれのローカル・アプローチを策定して具体的な都市像へと結実させようとしていることは知られています。私が提言している「生態有機都市」のデザインとは、都市を囲む森林や樹林地帯、緑地、水系、農道、農地や農村などの非都市的な環境と、都市の人工的な環境とを統合的に計画しよりするアプローチ以上の意味を持つものです。やや抽象的な言い方になってしまいましたが、従来の階層的な領域論で位置づけられる都市の物理領域を越え、自然環境と応答しながら発展してきた人間居住の歴史的な広がりや、都市や地域の境界を越えて広がる社会経済活動の範囲とも重なり、有機的に広がる現代社会のネットワークの中での暮らしや、地域の将来像を定する計画アプローチとして組み立てることが重要であると考えています。こうした新たな計画アプローチの試みでは、自律的な個々のまちづくりを通して形づくられる空間や環境の姿と目標を相互に関係づけながら、計画の妥当性や有意性を事前評価(アセスメント)して、それを途中の計画プロセスへとフィードバックしていく有機的な計画を描き出すことが求められ、そこでは以下の2つのアプローチが重要になってきます。

- 1) 地域固有の生態系や自然環境と都市の空間像が様々な方法で連続・連続する有機性
- 外部環境の変化に応答しながら長い時間をかけて進化してきた生命体の固有の形や姿は、いわば地球環境を生き抜く知恵が結集されたものです。こうした進化や変化を自ら起こし外部環境とのコミュニケーションを通して自己を定位する生命体の自律性やコミュニケーション性、適応性などは有機的な特性の一つと言えます。都市は人間社会が創り出した人工環境ですが、それは

## 特集 次の早稲田建築

巻頭論文

## 市民社会が創り出す生態有機都市 —自然環境との応答と commons の創成

有賀 隆

早稲田大学教授

# NEXT WASEDA



# 都市・まちづくり研究の視座

## 診断的視点

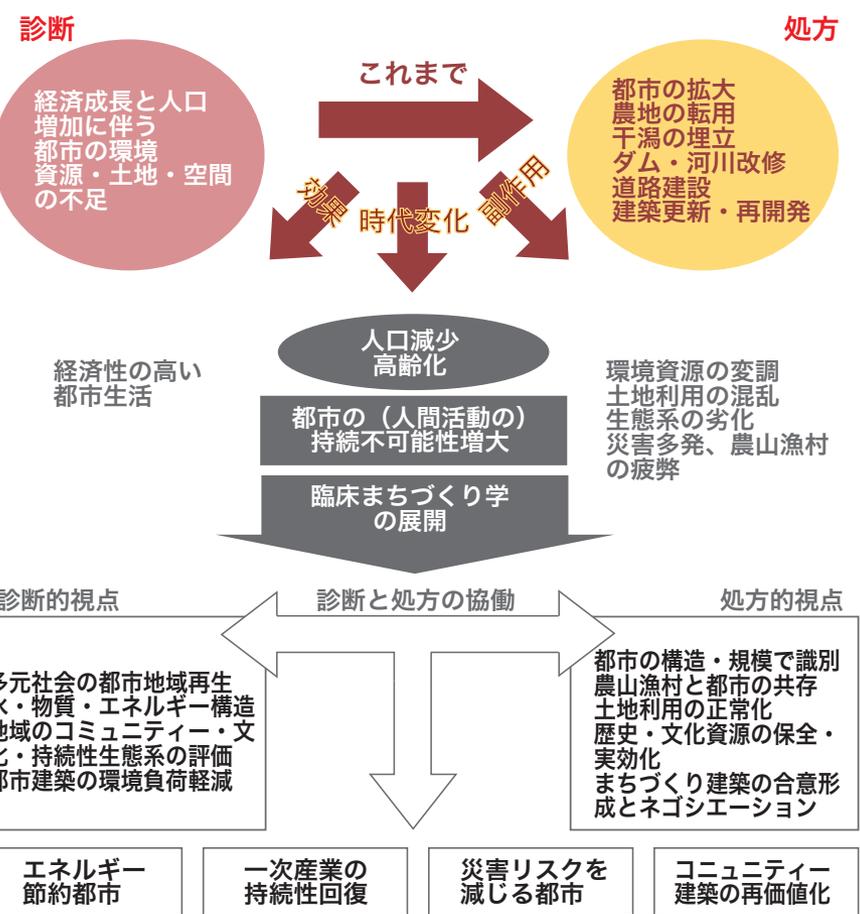
地域を越えた普遍的なテーマ設定

- ・地域毎の臨床まちづくり学の実践とつなぐ役割
- ・レビューと討論、外部講師
- ・協働して教科書体のレビューレポート作品

## 処方的視点

グループ・テーマ別	診断的	協働	処方的
アジアの多元社会と都市・地域	市民参加ワークショップと考現学調査・分析		コミュニティ建築のローカルアイデンティティとアーキタイプ
資源、エネルギーと循環	エネルギー節約シミュレーションモデル		水系、緑地、ランドスケープ建物のLCC
生態系と一次産業	集落・海岸地域の生態系回復		森林・気水域河川デザイン
災害リスクと減災社会	長期的災害リスク評価と多様な地域のまちづくりモデル		人間居住地の再編と市民合意形成

## アジア圏：「都市の人間活動と環境資源の共存」



人間活動と環境資源が共存できるアジアのグローバルネットワークの構築

# 地域・大学協働の調査研究と 市民・住民への提案

## (ベトナム・フエ市の例)



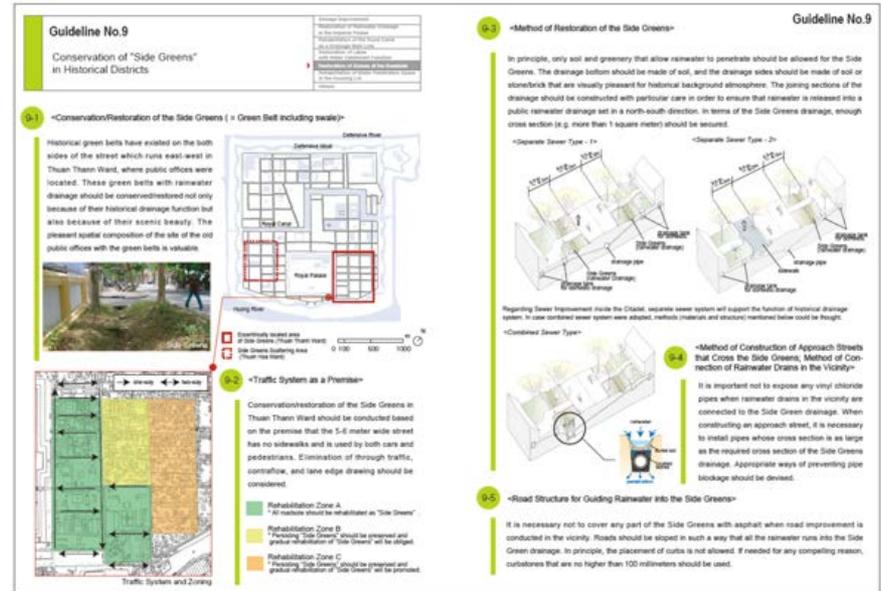
国際都市デザインワークショップ(2003~)

早稲田大学, フェ科学大学, グルノーブル建築大学, フェッラーラ大学,  
UCパークレー校による, 共同デザインワークショップ, フェ, 2013



現地行政担当者との実践的な共同研究

国際都市デザインワークショップで提案された内容に関する実務的議論とガイドライン化作業



## フエの歴史的水利環境に関する調査研究報告書 (ユネスコ受託研究, 2007)

若手研究者による国際都市デザインワークショップ

現地行政担当者との実務的検討 (計画・ガイドライン)

UNESCO等, 海外機関との共同提案

社会的波及  
効果の高い  
プログラム

## (カンボジア・中国・韓国他の例)



フィールドサーベイ (エネルギー調査)



拠点での資料整理



都市デザイン国際ワークショップ



協力校との情報交換・発表会



現地文化の理解



各種計測



# 人口流動時代の市街地像とまちづくり調査・研究

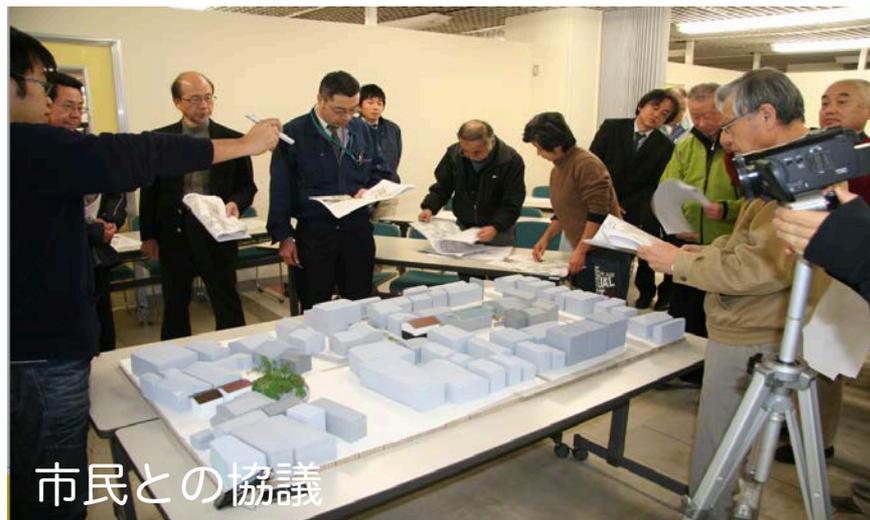
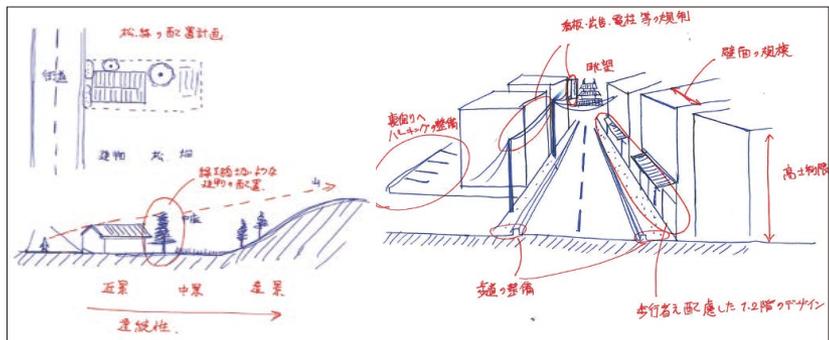
【研究キーワード】 歴史・文化資源を活かした市街地再生まちづくり

## 景観形成設計指針の調査研究と策定



行政との打ち合わせ

## 地区まちづくりデザイン計画のWS実施



市民との協議



# 歴史的風致を活かすまちづくり

平成26年度・都市景観大賞都市空間部門・優秀賞  
「小峰城跡・白河駅周辺地区（福島県白河市）」





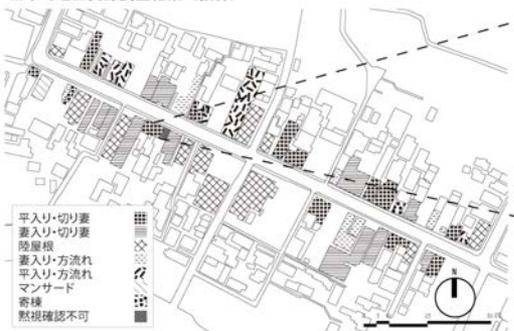


# 地域に根ざす生業・街区環境の マネジメント研究

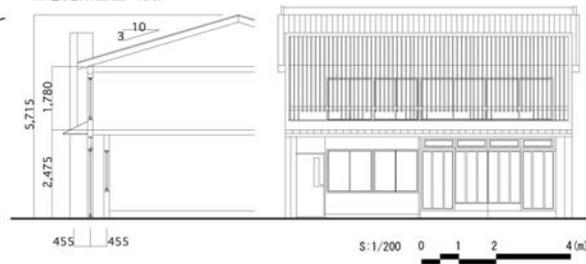
【研究キーワード】 ものづくり都市、旧街道集落の伝統風致、  
地場産業（醸造業）と建築、タイポロジー



■本町地区資源調査結果（抜粋）



■想定断面図（例）



※資源調査は早稲田大学有賀隆研究室と（株）齊藤建築設計事務所が第1次資源調査（平成21年6月30日）、第2次資源調査（平成22年1月26日）の2度実施。

■プログラム提案図



■S3による現況再現画像



■S3による計画案画像



# 都市・まちづくりデザインの 国際共同調査研究と提案



熱心な設計指導??



古川佐賀県知事（当時）も…!



白井早大総長（当時）が飛び入り!

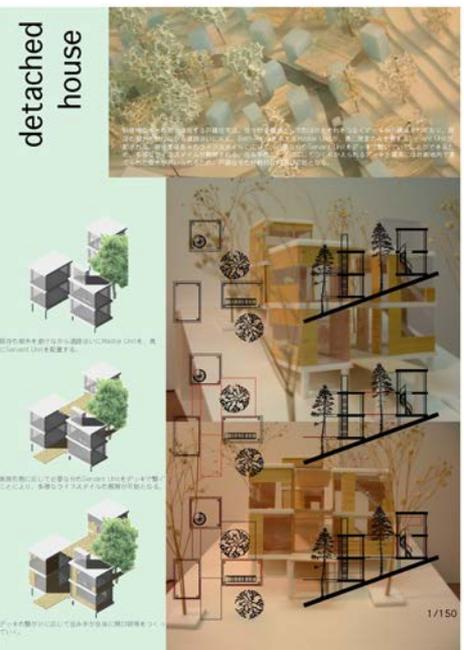
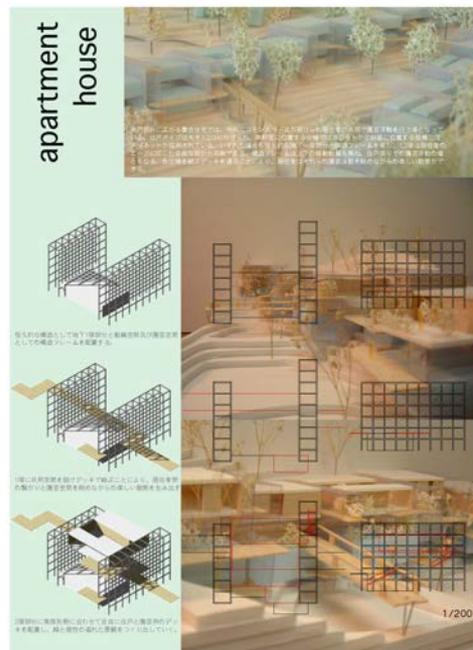
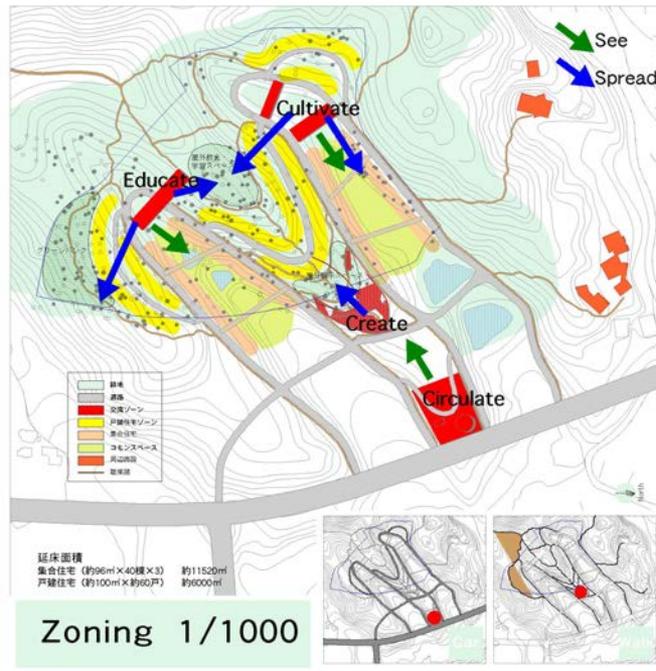


サプライズ誕生日ケーキ





# 都市の既存ストックを活用した「農」のあり方と空間像に関する調査研究



# 都市の既存ストックを活用した「農」のあり方と空間像に関する調査研究

## 3-4. 仮説の概念まとめ

### 都市農業建築における仮説と切り口

成果 result ————— 果実

1. 都市と自然の共生を可能にする (社会像)
2. 新たなライフスタイルの実現 (社会・生活像)
3. 都市における人の居場所としての農業活動 (生活像)  
→ 農業を介した新たなコミュニティの広がり
4. 先端技術を駆使した、新しい農業の確立 (社会像)  
→ 農業をすることの意味性の再考
5. 都市の景観づくりと維持 (空間像)

手段 method ————— 枝・葉

- A「都市美」の形成
- B「第二の自然」の形成
- C「都市住民の選択の自由」
- D「高齢化社会の光」
- E「農業がつくる都市のかたち」
- F「生活に必要な経済活動」

研究の切り口 aim ————— 木・幹

#### 「都市農業」

都市に農業を再編し、新しい価値観で豊かな生活を創造する

社会背景 social backgrounds ————— 根

- ・ 普段はオモテに現れない、現代都市の抱える社会問題や都市ストック、地歴や風土

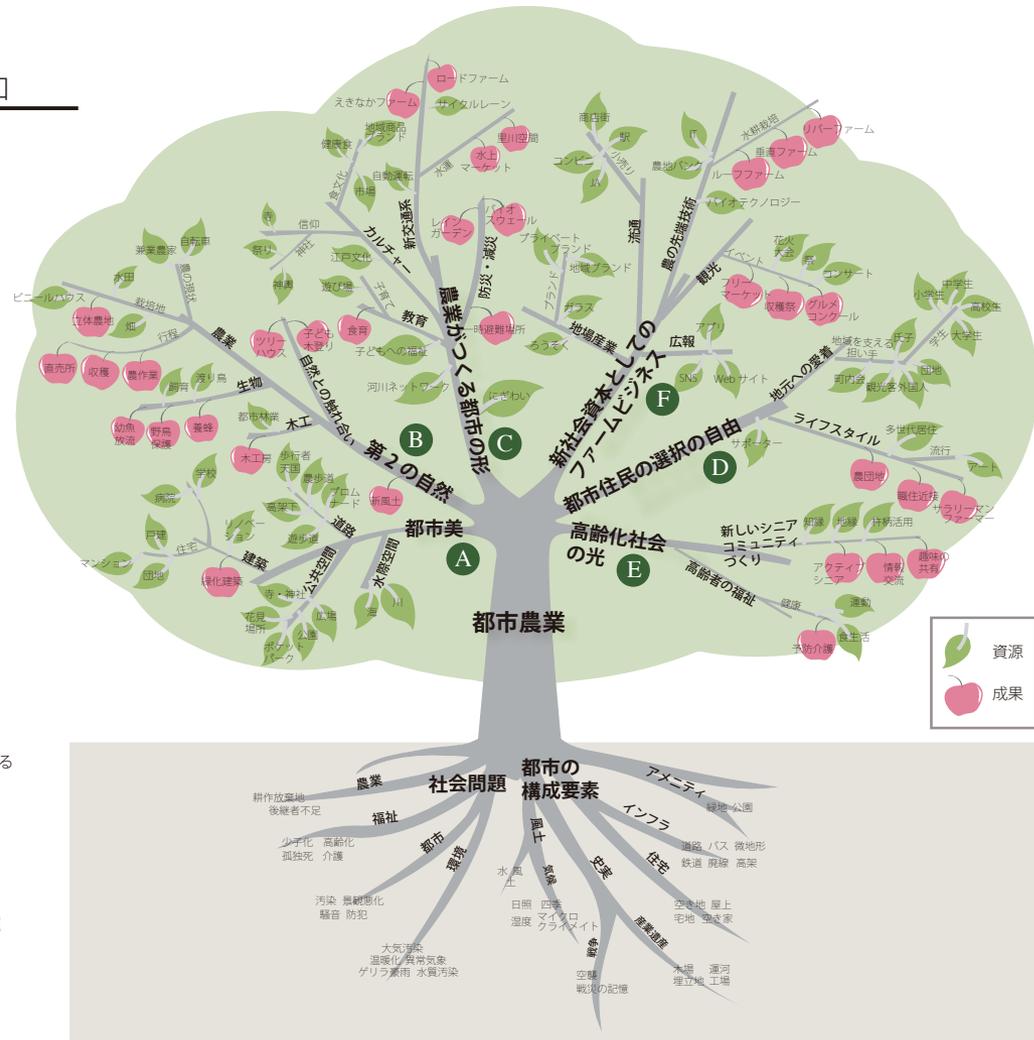
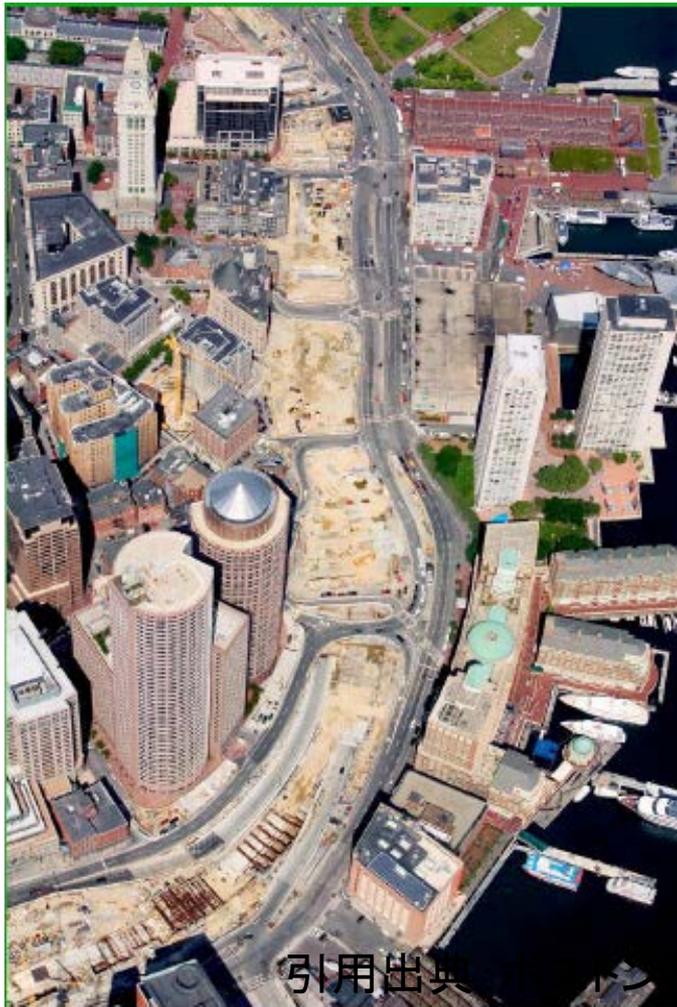


図1 都市農業建築における仮説と切り口



# 人口流動時代の市民交流拠点の設計 計画に関する研究

街路緑地・公園が都市の交流インフラとなる





**STATE STREET LOOKING SOUTH**  
The Wharf District Parks, part of the Rose Kennedy Greenway, are a portion of the more than 300 acres of landscaped open space created by the Central Artery/Tunnel Project. The Greenway, with 14 parks running from Causeway Street to Kneeland Street, is the final piece of the CA/T Project and will replace the elevated John F. Fitzgerald Expressway that was built through downtown Boston in the 1950s.

neospace

◆ 緑地帯を活かす文化・交流軸  
四日市市「中央通り」のリ・デザイン



### 3. 近鉄四日市周辺整備基本構想（案）

**視点①：賑わい・もてなし空間の創出と回遊性の向上**  
「顔・賑わいづくり」

**【①広場空間】**

これまでの交通機能を主とした駅前から、人々の待ち合わせや、憩いの場となる空間を西広場・東広場に確保し、市の顔・玄関口として賑わいのある駅前広場空間を創出し、駅周辺の回遊性を高めます。

**【②高架下通路】**

東西の広場空間と一体的に利用することで、駅周辺の滞留機能の向上や東西の回遊性を高めます。

**【③歩行者用デッキ】**

駅からバス専用ターミナル・南広場へ快適に移動できるよう、屋根・エスカレーター・エレベータを備え、バリアフリーに対応した歩行者用デッキを設置します。

**【④駅周辺】**

わかりやすい案内表示(サイン計画)により、まちの回遊性を高めます。

**視点②：まちづくりと連動した交通機能配置**  
「交通機能強化」

**【⑤バス専用ターミナル】**

これまで3箇所に分散していたバス乗降場を中央通り北側車道部に集約し、初めて訪れた人にも分かりやすくするとともに、駅東側商店街前・市役所方面及び並木空間への回遊性を高めます。また、駅とバス専用ターミナルを結ぶ歩行者用デッキにより乗継を円滑にします。

**【⑥観光バス】**

旅行者の需要に対応するため、博物館・市民公園前に観光バス乗降場を配置します。

**【⑦タクシー】**

駅、街からの乗車需要に対応するため、西広場・東広場の2箇所にタクシー乗降場を配置します。

**【⑧送迎車両】**

駅東西からの送迎需要に対応するため、西広場・南広場の2箇所に安全に送迎できる乗降場を配置(ハンディキャップスペースを含む)します。

**【⑨高架下】**

円滑な道路交通を確保するため、路肩への駐車を禁止します。

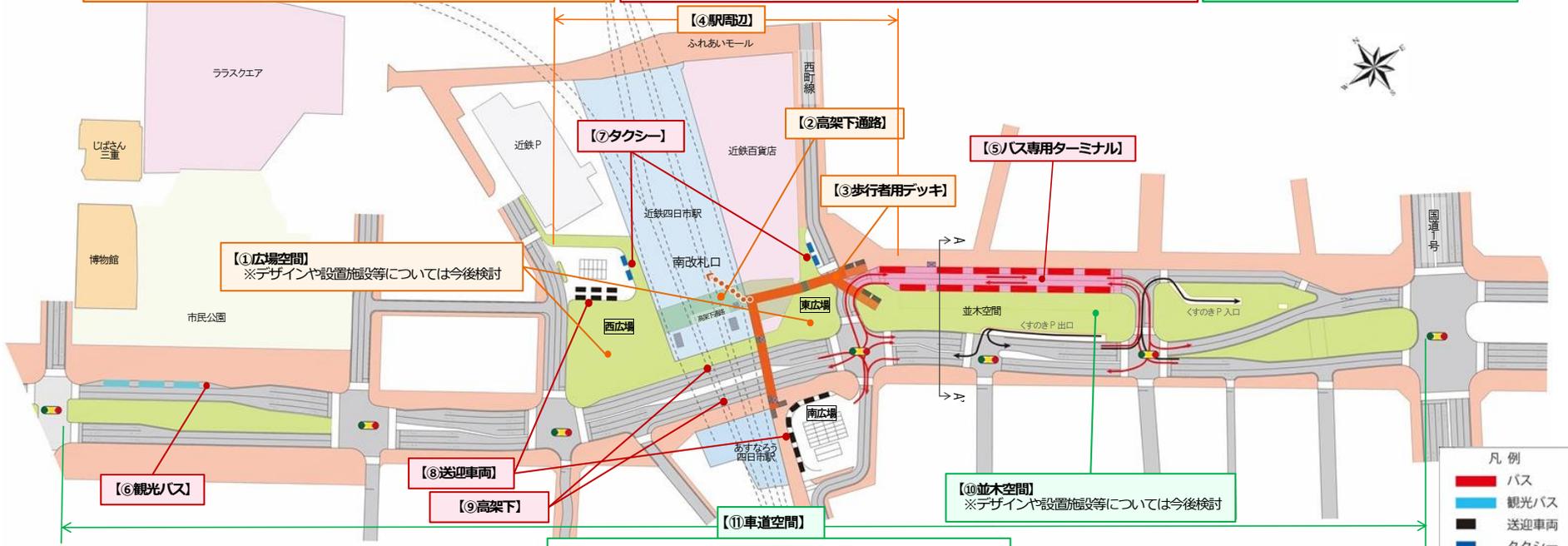
**視点③：中央通りを活用した空間の魅力向上**  
「魅力化」

**【⑩並木空間】**

活用されていない橋の並木空間をバス待ち空間や歩行空間、賑わい空間として有効活用するとともに、まちの都市景観の軸としての一体的な空間を形成します。

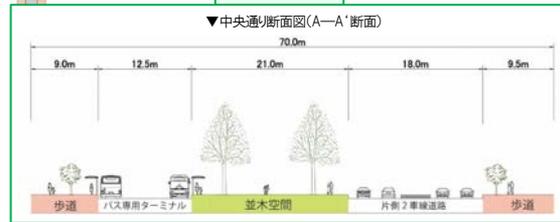
**【⑪車道空間】**

現状の片側3車線を2車線として、歩行空間等と利用転換するとともに、駅東側の車道を南側に集約し、東広場とバス専用ターミナル・並木空間の一体性を高めるとともに、南北の横断を容易にします。



▼交通機能の配分検討案

交通機能の区分	西広場	東広場	南広場	商店街前	合計(台)
バス乗降場	-	-	-	12	12
バス待機場	-	-	2	-	2
タクシー乗降場	2	2	-	-	4
タクシー待機場	12	-	24	-	36
送迎車両	6	-	7	-	13
観光バス	-	-	-	-	3



概算事業費規模：50億円程度  
※詳細な検討を進める過程で精査します。

# 地域に根ざす市民・大学協働まちづくり活動（有賀隆研究室）

2-1. 構想提案の概要

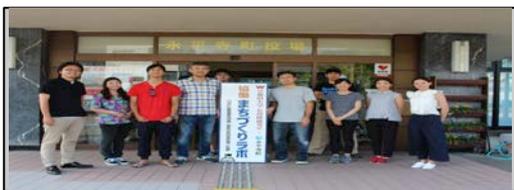
奥能登の“通り庭”中居  
… 4つの“通り庭”提案 (p.48 ~ p.50)

通り庭…人々が行き交い、中居の  
海と山と家並みを生かす空間

- 1 中居の海の魅力を高める  
うみのみち (p.49)
- 2 中居の山の魅力を高める  
やまのむねみち (p.49)
- 3 海と山と家並みをつなげる  
よりのみち・よこみち (p.50)
- 4 人々の生活の場をつなげる  
なかいのくちわだし (p.50)

→ ゆるやかな中居の再興へ

地域: 石川県鳳珠郡穴水町中居地区  
協働: 穴水町役場、石川県、早稲田大学、総務省  
期間: 2013年~2015年  
内容: 能登を舞台とした域学連携地域づくりフィールドの構築・実践  
担当: 有賀隆研究室



地域: 福井県吉田郡永平寺町  
協働: 永平寺町役場、早稲田大学  
期間: 2016年~現在  
内容: 地域創成まちづくりラボの拠点形成と地方への若者の流れに着目したまちづくり調査・研究ならびに提案  
担当: 理工学総合研究所、有賀隆研究室

地域: 三重県四日市市中心市街地  
協働: 四日市市役所、早稲田大学  
期間: 2001年~現在  
内容: 地域協働による都市計画マスタープラン・中活基本計画・すわ公園交流館ならびに中心市街地拠点施設整備計画の調査・検討ならびに提案  
担当: 理工学総合研究所、有賀隆研究室



地域: 東京都港区  
主体: 東京都港区  
期間: 2014年~現在  
内容: 市街地再開発事業の事後評価制度の開発に関するまちづくり調査・研究と提案  
担当: 有賀隆研究室



地域: 北海道河西郡芽室町  
協働: 芽室町役場・芽室町民「夢プラン実現隊」、早稲田大学、北海道大学、総務省  
期間: 2013年~2014年  
内容: 十勝芽室の風景資源調査と景観まちづくり計画の策定・提案  
担当: 有賀隆研究室



地域: 福島県白河市  
協働: 白河市役所、(NPO)しらかわ建築サポートセンター、本町地区まちづくり協議会、早稲田大学、福島県、国交省、文化庁  
期間: 2008年~現在  
内容: 地域協働による歴史まちづくり・東日本大震災復興まちづくり・景観まちづくりの調査・計画策定および提案  
担当: 理工学総合研究所、有賀隆研究室

